



東海道かわさき宿交流館 開館までの歩み  
TOKAIDO KAWASAKI SHUKU KORYUKAN



川崎市 総合企画局公園緑地まちづくり調整室  
川崎区役所まちづくり推進部地域振興課

## 1 はじめに

江戸時代に東海道五十三次の一つとして栄えた宿場で、現在の川崎の街の原点となる重要な歴史的資源である東海道川崎宿の歴史・文化を学び、それを後世に伝え、地域活動・地域交流の拠点となることを目指して、平成 25 (2013) 年 10 月 1 日、東海道かわさき宿交流館（以下「交流館」という。）が開館した。歴史・文化をまちづくりに活かし、地域と連携して進めた交流館の開館までの取り組みについて紹介する。

## 2 「大川崎宿祭り」

慶長 6 (1601) 年に徳川家康によって東海道に宿駅・伝馬制度ができてから 400 年後の平成 13 (2001) 年、「東海道宿駅制定 400 年記念大川崎宿祭り」が地域の方々に結成された「大川崎宿祭り実行委員会」の主催により開催され、川崎宿で有名な茶屋であった万年屋の再現、「六郷の渡し」の復活、川崎ゆかりの歴史時代行列をはじめとした大パレードなどを行い、参加者は延べ 3,000 人を超え、10 万人の人出で賑わった。これを契機に、川崎宿を軸とした歴史・文化を活かしたまちづくりの機運が高まることとなる。



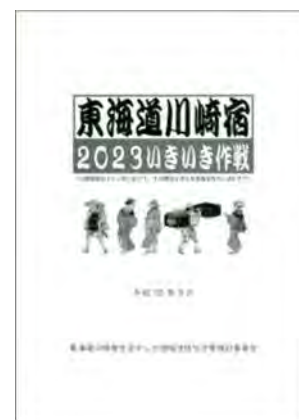
大川崎宿祭り大名行列



大川崎宿祭り万年屋を再現

## 3 「歴史を活かしたまちづくり」組織

「大川崎宿祭り」の翌年の平成 14 (2002) 年、川崎宿の歴史を後世に伝えていくため、町内会・まちづくりクラブ・観光ボランティアガイドなどが集まり、「東海道川崎宿を活かした地域活性化方策検討委員会」が結成された。そして、平成 15 (2003) 年、川崎宿起立 400 周年にあたる 2023 年を活動の目標年次に定めた、川崎宿を活かした地域活性化のための市民提案書の「東海道川崎宿 2023 いきいき大作戦」をまとめ、川崎宿の歴史・文化に触れられ、地域交流などができる拠点整備の必要性もうたわれた。



東海道川崎宿 2023  
いきいき大作戦

#### 4 東海道川崎宿 2023 の取り組みの進展と地域要望の高まり

「東海道川崎宿 2023 いきいき大作戦」の取り組みを進めるために、新たに「東海道川崎宿を活かした地域活性化推進組織（通称：東海道川崎宿 2023）」が平成 16（2004）年に結成され、浮世絵ギャラリー（シャッター、タペストリー）の整備、閻魔寺寄席の開催など、歴史・文化を活かしたまちづくりを地域と行政の協働で進めた。また、こうしたまちづくりの拠点となる施設として「東海道川崎宿歴史資料館（仮称）整備基本構想」が東海道川崎宿 2023 によってとりまとめられ、平成 21（2009）年に、市民からも署名 7,957 名分を添えた「東海道川崎宿歴史資料館設立陳情書」が川崎市長に提出された。

#### 5 施設整備の決定、施設計画の検討

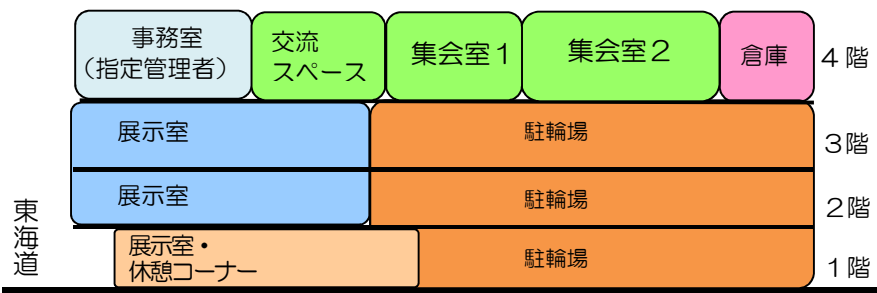
川崎市は、東海道や大山街道などの街道や宿場町として、また川崎大師の参詣などによる人の往来と営みの中で文化を育んできた歴史的な経過があり、とりわけ東海道川崎宿は重要な歴史的・文化的資源であること、また、地域における様々な取り組みや要望などが出されている背景を踏まえ、平成 23（2011）年 2 月、「川崎駅周辺地域における文化資源等を活用したまちづくりの考え方」を、パブリックコメントを踏まえて策定し、施設を整備することとした。場所については、東海道に面する旧水道局営業所用地で駐輪場整備の計画があったことから、駐輪場との複合施設として整備することとし、「（仮称）東海道まちづくり文化・交流拠点基本計画」（以下「基本計画」という。）を同年 3 月に策定した。

平成 23 年度には基本計画に基づき、具体の施設設計が進められ、建物は鉄骨造の 4 階建て、縦格子や軒など江戸時代の町屋のデザイン要素を取り入れた外観とした。また、主に 1 階から 3 階までが展示室、4 階は集会室とし、平成 24 年度には施設の建設が開始され、並行して具体の展示内容の検討、制作を進めた。



東海道かわさき宿交流館の外観

施設配置：



## 6 展示制作

川崎宿は戦災などにより昔の街並みは失われ、また多くの資料を焼失したが、今回の展示ではそれを逆手にとり、ケースの中に入った資料を外から眺めるだけの従来型展示ではなく、自分で触ったり操作したりできるような体験型展示を多くし、楽しく学べるようにした。

1階は、川崎宿で一番人気の茶屋であった万年屋を模したお休み処を配置し、東海道や川崎宿の概要を説明する映像を大型スクリーンで流すこととした。またこの映像の説明役として、キャラクターが必要であった。このため、説明役として愛嬌ある中でも、エッジの効いた表情の人形劇の人形として、「六さん」こと飛脚の六助を制作した。「六さん」という名前は「六郷の渡し」からのものである。この「六さん」は、展示映像の中だけでなく、その後、公認キャラクターとして広報ポスターや広報映像、キャラクターグッズとしても活用している

1階奥には、要望が多かったまち歩きをする方が気軽に立ち寄り、飲食可能な「休憩・交流スペース」も設けた。

2階は、江戸時代の川崎宿についての展示フロアで、タイムスリップして江戸時代の川崎宿を感じてもらうため、床に川崎宿を再現した立体的な絵地図を描き、あたかも東海道を歩いているようにした。

さらに、床面の川崎宿の位置に合わせて「ものがたりBOX」を配置し、模型と融合した映像やグラフィックなど様々な手法により川崎宿で起こったエピソードを紹介する仕掛けとしている。エピソードは文献などから掘り起こしたが、現在の街並みからは想像することができない面白いものばかりである。

「幕末の万年屋」では、外国人公使の暗殺を計画していた長州藩の久坂玄瑞（くさかげんずい）が、その直前に川崎宿の万年屋で坂本龍馬と会合

していた可能性があることについて初めて紹介している。久坂玄瑞の日記に「龍馬と万年屋一酌 品川に帰る」と書かれているのを発見したことが発端となった。電車も車も



2階 床面の絵地図とものがたりBOX



2階ものがたりBOX「幕末の万年屋」

ない時代に夜川崎で一酌して品川に帰れるのか、当時の移動手段等を調査したり、暗殺計画についての事実関係について各藩が書き残した記録と矛盾がないか、国会図書館などに行き関連する資料を調査するなど、様々な角度からの検証を行い、その結果、断定はできないものの事実である可能性が高いことが分かり、それを紹介する展示とした。

川崎宿の街並みの中を疑似散歩できる「再現・川崎宿の街並み」というBOXもある。市民ミュージアムに川崎宿を再現した、建物の中まで精巧に作られている模型があるが、この模型を小型カメラで撮影すると、あたかも模型の中を歩いているような映像により、当時の川崎宿を感じてもらえるのではないかと考え、撮影・映像制作スタッフとともに丸3日かけて撮影した。少しずつカメラを平行に移動させながら何千枚もの写真を撮影し、それらをつなぎ合わせた。既存の模型を違った視点で見ることができるとは思わなかっただけでなく、市民ミュージアムに行ってもらえるきっかけにもなり、相乗効果が期待できるものとなっている。

経費をかけずに質の高い展示を作るために、すでにある貴重な資源を新しい発想で活用するアイデアが今回の展示に盛り込まれた。

3階は、江戸時代から現代に至る川崎の歴史や文化を様々な角度から展示したフロアで、コンパクトに分かりやすく見せる工夫をした。その1つに、大型ディスプレイを使った「川崎発掘・いまむかし」という装置があり、現在の市内の見どころ施設情報とともに、川崎の移り変わりを見てもらえる仕掛けとなっている。移り変わりは、タッチパネル式の大画面の中に明治から現代までの川崎市全域の空中写真と地図を重ね、画面をタッチすると、丸い覗き穴が開き、タッチするごとに次々と過去の時代に遡っていくことができる仕組みとした。また、1人だけでなく、複数の人が同時に操作しても対応するシステム（アルゴリズム）を工夫した。



2階ものがたりBOX「再現・川崎宿の街並み」



市民ミュージアムでの模型撮影



「川崎発掘・いまむかし」

「川崎分解劇場」という装置では、通常の歴史展示とは違う発想で、川崎市の都市構造を掘り下げようとするもので、江戸時代から現代に至る川崎を様々な角度から分解して、紙芝居のように引き出したり、重ねたりすることができる仕掛けとしている。1つは要素編で街道、鉄道、多摩川、二ヶ領用水の4つで分解し、もう1つは時代編で江戸、明治、戦前、戦後の4つの時代に分解している。このように、他の歴史展示施設にはないような仕掛けが満載の施設となった。

なお、今回の展示制作にあたっては、市民ミュージアム所蔵の資料を活用するとともに、学芸員に御協力いただくなど市民ミュージアムと連携した。また、展示に使用する浮世絵などの資料について、砂子の里資料館をはじめ多大なる御協力をいただいた。

## 7 施設整備等に市民意見を反映させるために

市民主体による歴史・文化を活かしたまちづくりの取り組みの推進の一つとして、拠点の整備がなされることから、施設整備等に市民意見を反映させるため、川崎区に「(仮称) 東海道まちづくり文化・交流施設運営準備会」(以下「運営準備会」という。)を平成24(2012)年6月に設置した。地域・文化・商業・教育関係者など14名が委員として平成24年度は2ヶ月に1回の割合で5回開催し、平成25年度は3回開催した。

話し合われた議題は、施設の名称、展示内容、開館記念式典、施設の利用方法などである。①地域が愛着をもてる施設とするために施設の名称を「東海道かわさき宿交流館」とすること、②体験コーナーの衣装の作製、③多摩川を象が渡ったエピソードの紹介、④JR東日本の「駅からハイキング」との連携、⑤施設紹介DVDの学校への配布、⑥落語の公演など様々なアイデアをいただいた。

## 8 PRコンテンツの作成、音楽の制作

展示制作に一定の目途がつき、次のステップとして、開館に向けたPRコンテンツの制作に取り組んだ。

映像コンテンツとしては、JR川崎駅東西自由通路のアゼリアビジョンや区役所の情報掲示用液晶パネルなどで繰り返し放映する30秒のコーシャル映像と、YoutubeにUPしたり、配布用DVDに掲載したりする6分ほどの施設紹介映像



アゼリアビジョン映像

の2種類を作成した。

コマーシャル映像には通行者を振り向かせるようなインパクトのあるテーマ音楽が必要であり、また、施設紹介映像にも映像に合わせた数曲の音楽が必要だった。

当初は、展示用に作成した映像のBGMを流用することを考えていたが、これらの展示映像用BGMは有料で販売されている著作権つきBGMだったため、展示映像以外での使用についてのライセンスが得られなかった。このため、新たにオリジナルの楽曲が必要になったが、展示委託契約にはオリジナル楽曲の作曲・制作が含まれていなかったため、音楽制作のノウハウを持っている市職員が直営で作曲・制作を行うこととした。

また、これらのオリジナル楽曲については、コマーシャル映像や施設紹介映像だけでなく、館内で放映する映像の幕間のBGMなどとしても活用することとした。

施設紹介映像の制作についても、限られた予算の中で、できるだけ質の高いものとするため、音楽制作だけでなくナレーションの録音・編集などの音響部門についても市職員が直営で行うこととし、委託料の予算は、現場ロケなどの撮影部門に集中的に割り当てることとした。

また、声の出演についても、市職員の知人の声優にボランティアで協力をお願いしたり、現場ロケでも市職員・家族がエキストラを演じるなど、スタッフ部門、キャスト部門ともかなりの部分を手作りで行うこととなった。

その他のコンテンツとして、ポスターやチラシなどを制作したが、交流館のCI戦略として、交流館のロゴを作成し、六さんのキャラクターと組み合わせて積極的に活用することとした。このため、交流館のロゴと六さんのキャラクターについては、商標登録を行う予定で手続きを進めている。

## 9 交流館の管理・運営

交流館は指定管理者により管理することとし、第1期の指定管理者として、川崎市文化財団・川崎市観光協会グループが選定された。一方、地域の関係者の働きかけにより、交流館の運営のための寄附金の募集が行われ、市民や企業など多数の寄附が寄せられた。この寄附金は、主に企画展の充実など交流館の運営に充てることとされた。

平成25年11月末時点寄附金の額は約4,000万円とのことである。



音楽・音響制作、ナレーション録り  
現場ロケ等の様子

## 10 開館記念式典・市民向け内覧会・開館

開館に先立ち、平成 25（2013）年 9 月 28 日に開館記念式典を行った。

式典当日、1 階正面入口において、川崎古式消防記念会による木やり（民謡の一つ）とテープカットを行ったが、招待者が道路にあふれることが想定されたため、多くの招待者は 4 階集会室において、中継映像を見てもらいながら進行する式典となった。川崎区文化協会による箏（こと）・尺八の演奏、区の花のひまわりを使った祝い花など、全体的に地域による「お・も・て・な・し」を表現した。

また、9 月 29 日に市民向け内覧会を行い、予想を大幅に超える約 650 名の方に来館いただき、そして 10 月 1 日に無事開館となった。



開館式典 テープカット



開館式典 箏の演奏

## 11 おわりに

開館約 1 か月後の 11 月 6 日には交流館の来館者が 1 万人を超えた。指定管理者が目標として掲げた年間 4 万人をはるかに超えるペースであり、順調にスタートしたといえる。指定管理者が企画展として行った「開館記念特別展 広重・東海道五拾三次」や「クラス単位での小学生の見学」「観光ツアー」などにより、多くの方に訪れていただいたものと考えます。

現在、指定管理者が、引き続き地域から様々なアイデアをいただくため「東海道かわさき宿交流館運営委員会」を立ち上げている。今後は、指定管理者と連携しながら、地域だけでなく他の宿場など広域の連携も進めていきたい。

交流館が開館 10 周年となる 2023 年には、川崎宿起立 400 周年を迎える。2023 年に向け、「東海道に川崎あり」と他の宿場関係者から目標とされるような施設を目指し、今後も地域の取組とともに交流館や周辺地域の魅力が向上することが期待される。



開館ポスター



開館記念特別展  
ポスター